

ushikai
牛飼遺跡

ふくおかけん や め し たちばなまち はるじま うしかい
福岡県八女市立花町原島字牛飼所在遺跡の調査報告書

八女市文化財調査報告書 第91集

2011

八女市教育委員会

序

八女市の南辺に位置している立花町には、数多くの遺跡が知られています。

その西側に所在する北山地区や白木地区では、縄文時代や弥生時代、古墳時代の遺跡が数多く点在しています。中でも農道の建設工事に伴って調査が行われた幾野々原遺跡では銅鏡（後漢鏡）の破片が出土しており、この地に民衆を取りまとめる事の出来る有力者が芽生え始めている事を示しています。

今回調査が行われました原島地区は、近年になってようやく本格的な文化財の学術調査が行われるようになったところで、現在、各種開発事業に伴う試掘・確認調査を精力的に行っています。しかしながら、調査件数の絶対数が少ない故か、遺跡の包蔵がどの程度の広がりを持っているか、今だ不明瞭な部分もあります。

貴重な文化遺産である遺跡を、地権者の方々の努力と御理解のみで現状を保存してゆくのは非常に困難な事であり、八女市教育委員会では現在、事業地における事前発掘調査を行い、遺跡を記録として保存し、後世に伝えていく発掘調査事業を継続して行っています。

今回、発掘調査を実施した牛飼遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地ではありませんでしたが、事業が県道拡幅工事であり、道路は半永久構造物との認識のもと、事業者の御協力を頂きつつ発掘調査を行いました。

詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、歴史遺物がどのように包蔵され、また拡散しているかを認識する上で、非常に大きな成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該遺跡、そして八女市にある全ての文化財に対して、市民皆様の愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に際し格段のご協力とご理解をいただきました福岡県八女県土整備事務所 所長 橘原 精治 様をはじめ、関係者各位、そして地元原島地区の皆様には並々ならぬご理解と応援を戴きました。

深く御礼を申し上げるとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月31日

八女市教育委員会
教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は立花町教育委員会（現 八女市教育委員会）が、福岡県八女県土整備事務所 所長 檜原 精治より委託を受けて実施した立花町大字原島（現 八女市立花町原島）に所在する弥生時代及び古墳時代を中心とした遺物包含層の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は立花町教育委員会（現 八女市教育委員会）が主体となり実施した。
発掘現場における調査は平成21年度に行い、整理作業及び報告書作成は平成22年度に行った。
- 3 発掘調査では調査区内に区割り（グリッド）を設定し、グリッド毎に調査・遺物の取り上げを行った。
また、検出した遺構には記号を付し、ビット状遺構はSPと、グリッドにはGを表記した。
- 4 本書に使用した測量図の作成は大久保を中心に福岡県文化財保護課職員等で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した写真は遺構関係を大久保が撮影し、遺物関係を大塚が撮影した。
- 6 本書使用の標高は海拔高であり、方位は全て磁北である。本地域における真北との偏差は約 $6^{\circ}10'$ である。
- 7 本書の執筆、及び、編集は大塚が担当した。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は、現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I	調査の経過	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	3
III	調査の内容	6
	1. 調査経過	6
	2. 包含層の調査、及び、出土遺物	6
	(1) 包含層の調査	6
	(2) 排土中出土遺物	7
	(3) グリッド出土遺物	8
IV	まとめ	16

挿図目次

第 1 図	牛飼遺跡位置図と周辺の遺跡 [1/25, 000]	4
第 2 図	牛飼遺跡位置図 [1/2, 500]	5
第 3 図	牛飼遺跡 平面実測図 [1/100]	6
第 4 図	牛飼遺跡南東側土層断面実測図 [1/60]	7
第 5 図	牛飼遺跡 排土中及び遺構検出面表採遺物実測図 [1/3]	8
第 6 図	牛飼遺跡 グリッド内出土遺物 実測図 [1/3]	9

表目次

第 1 表	牛飼遺跡 出土遺物観察表	10
-------	--------------	----

図版目次

PL1~PL2	牛飼遺跡 現地調査状況
PL3~PL4	牛飼遺跡 出土遺物

調査の経過

1 調査に至る経過

八女市立花町の北東部に位置する原島地区は1級河川である矢部川の左岸に面しており、旧柳川藩が境原に井堰を設け取水した川水を自領に引き込む為に施工した柳川用水路と、同じく矢部川より派生した支流である辺春川に挟まれた地区に所在する。

近年、市内各地で道路等の拡幅工事が盛んに行われており、当地区周辺においてもこれらを原因とした発掘調査が少しづつ行われるようになり、その結果、僅かではあるが当地域の古代における実態が把握出来るようになってきた。しかしながら、開発の波は結果的に古代の痕跡を狭めて行く事となり、今後も当該地域も含め市域全体に対し注意を払う必要があるであろう。

本調査の発端は、福岡県八女県土整備事務所が行っている県道久留米立花線拡幅工事に伴う事前確認調査の依頼であった。

平成21年4月24日付において福岡県八女土木事務所（現 八女県土整備事務所）所長より、文化財の所在の有無について（照会）（立花町教育委員会第2262号）が提出され、立花町教育委員会は事業者との協議に入った。この協議において事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、遺跡の有無を判断する為に試掘調査を行う旨を説明した。平成21年5月21日に福岡県教育委員会文化財保護課職員立ち会いのものと調査を行った結果、遺構・遺物が出土した。教育委員会ではこの結果を平成21年5月29日付けで福岡県八女土木事務所に対し回答（21立教社第226号）を行い、開発にあたり文化財保護法第94条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘の通知を提出して頂く旨事業者にお伝えし、発掘調査に向けた実質的な協議を継続して行った。

平成21年6月17日付けにより、事業者より県道久留米立花線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出（21女土第1032号）が提出され、平成21年7月1日付けで主要地方道 久留米立花線 原島工区道路拡幅工事の埋蔵文化財に関する基本協定書を交わし、平成21年7月6日から同年10月20日まで現地において発掘調査を行った。

また、整理調査においては、平成21年度に締結した協定書に基づき平成22年度に八女市教育委員会が整理調査事業主体者となり整理事業にも着手した。

発掘・整理調査における体制は以下の通りである。

2 調査体制

〔工事事業主体〕

福岡県八女土木事務所

所長 植原 精治（平成22年3月31日退任）

福岡県八女県土整備事務所

所長 廣松 誠（平成22年4月1日就任）

〔調査主体〕

立花町教育委員会

〔平成21年度〕（平成22年2月まで）

教 育 長	西島 民生
教育次長	中尾 信幸
教育次長補佐	持丸 末喜
社会教育係長	深町 明夫
同 係員	中園 弘一
同 係員	大久保 寿子（発掘調査担当）

八女市教育委員会

〔平成22年度〕（平成22年2月に旧立花町との合併。体制は4月以降分）

教 育 長	西島 民生
教育部長	飯田 せつ子
文化課長	井上 富雄
文化財係長	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（整理作業担当）
同 係員	永田 寧
同 係員	渡部 真弓

調査作業（五十音順）

大久保ミツル、江崎 弘子、平島 史朗、深町 朝生、深町 善春、山中 誠司

調査協力

福岡県教育庁総務部文化財保護課

調査第一係 参事補佐	佐々木 隆彦
同 技術主査	齋部 麻矢

※整理作業は八女市教育委員会 文化課 文化財係が行った。

なお、発掘調査にあたり、福岡県八女県土整備事務所長、及び関係者の皆様からは現地調査中に多大なる御援助・御協力を賜りました。また、周辺地域の住民の方々には多大なるご配慮とご理解を賜り、本調査に対し暖かいご声援を戴きました。紙面上で恐縮とは存じますが、御礼申し上げます。

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部に位置し、西に筑後市、北に広川町、東に大分県日田市、南に熊本県山鹿市、みやま市と4市1町と境を接し、大分県や熊本県との県境となる、まさに県境の都市である。主に農業を基幹産業とするその立地は、耳縄山地南緩斜面より西方に延びる八女台地（八女丘陵）と浮羽地区などとの境となる水縄山地、福岡・熊本両県を区する筑肥山地をその懷に抱き、釈迦岳山地に源を発し黒木盆地を経て平野部を西流する一級河川 矢部川によって形成された扇状地から成り立っている。

牛飼遺跡は八女市の南西部に位置する立花町原島地区にある。星野川と矢部川の合流地点の南側に隣接しており、遺跡北面にはその矢部川が形成した低位段丘上にやや東西方向に細長く水田や畑が広がる。

交通事情に目を移すと、近年ますます需要が高まっている主要地方道久留米・立花線が当地域を南北に貫いているが、交通量に比し道路幅が狭く利便性の向上が急務であった。交通事情の面からすれば利便性が若干低い地ではあったが、反面、水田や畑、ハウスなどに囲まれた閑静な地域となっており、都市とは異なる快適な居住環境が整っている立地となっている。

【歴史的環境】

牛飼遺跡は八女市立花町原島に所在する弥生時代後期から古墳時代後期を中心とした遺跡で、中心となる遺構は遺物を多量に含む包含層である。

当該遺跡周辺は本発掘調査による調査履歴がほとんどなく、地下に埋蔵されている文化財の様子が不確定な部分も多いが、以前から行われていた踏査や分布調査等の成果により、当遺跡から東南東400mの丘陵部突端には弥生時代を中心とした大規模遺跡である辻遺跡が存在する事が判明している。また、辻遺跡の周辺には古墳時代後期の横穴墓が見つかっており、原島地区周辺は弥生時代から古墳時代にかけて古代文化が展開した総合的な遺跡群と考えられる。以下、旧八女市南東部における弥生時代、及び、古墳時代の遺跡も含めた周辺遺跡の概略を記述する。

旧八女市南東部における弥生～古墳時代の遺跡は津江・祈禱院遺跡群や柳島遺跡群などが散布地として所在している。津江・祈禱院遺跡群においては近年ほ場整備事業に伴う発掘調査が行われており、古墳時代前期を中心とした弥生時代後期～古墳時代後期の遺跡群であることが判明している。また、本遺跡から東北東1.7kmには内部主体に箱式石棺を用い、棺内から銅鏡や勾玉、管玉などが出土した城の谷古墳が挙げられる。城の谷古墳の墳丘上では旧八女市では唯一の経塚が発見され、内部からは銅製経筒が出土している。

旧立花町にける本遺跡周辺の地形は矢部川及び辺春川が形成した扇状地と筑肥山地から北に延びた丘陵地から成り立っている。低地部分においては現在までのところ集落遺跡等の痕跡が発見されておらず、古代における現地は定住にそぐわない低湿地状態にあったものと思われ集落群の形成にはやや不向きであったことが伺える。丘陵部では比較的多くの遺跡が展開しているが弥生時代に属する遺跡は少なく、南東約400mに弥生時代後期を中心とした散布地として周知されている辻遺跡が所在するのみである。古墳時代においては南東約400mに浦田横穴墓群が展開し、南西1.5kmには鬼隈横穴墓群や中通横穴墓群、上ノ山横穴墓群などが展開し、造墓活動が盛んであったようだ。しかしながら造墓に携わった人々の生活痕跡がいまだ見い出せておらず、今後周辺地区の丘陵部で大規模な集落遺跡が発見される可能性が高い。



0 500 1000 1500 2000m

- 1.牛飼遺跡 2.辻遺跡群 3.浦田横穴墓群 4.後田横穴墓群 5.草場横穴墓群 6.鬼隈横穴墓群
 7.中通横穴墓群 8.上ノ山横穴墓群 9.上ノ山古墳群 10.上ノ山古墳群(消滅) 11.高野町遺跡
 12.明洲遺跡3次 13.榎町遺跡 14.柳島遺跡群 15.城の谷古墳 16.北田形遺跡群

第1図 牛飼遺跡位置図と周辺の遺跡 [1/25,000]

Ⅲ 調査の内容

1. 調査経過

今回の調査は、福岡県土木事務所（現 福岡県八女県土整備事務所）が当地に主要地方道久留米立花線原島工区道路拡幅工事を行う為の事前調査である。

事前に行った試掘調査の結果を基に、事業主体者と発掘調査実施に係る協議を行った結果、埋蔵文化財に対し影響が及ぶ可能性が考えられる部分について調査を実施する事となり、平成21年7月から同年10月まで現地において発掘調査を行った。

調査区は南北約15m、東西約5m規模とし、掘削を開始した。調査の結果、古墳時代～奈良時代を中心とした遺物が包含層内から出土し、また、調査区北端付近ではピット数個を検出したが、湧水が予想以上に多く、掘削は断念した。以下、包含層の調査、及び、出土遺物について記述する。

2. 包含層の調査、及び、出土遺物

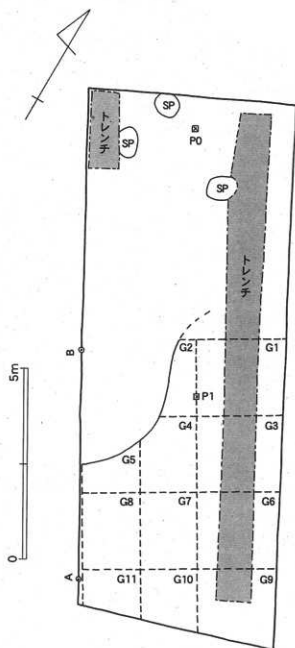
(1) 包含層の調査

包含層 [第4図 PL2]

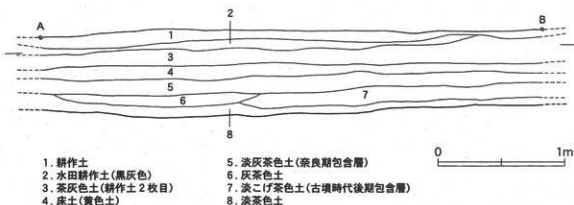
現表土（耕作土）から0.6m掘り下げたところで試掘調査時に確認していた遺物を少量包含していた淡灰茶色土（第4図 第5層）が現れたため、慎重に作業を進めた。掘削中、排土の中に須恵器や土師器等の遺物が混入していたため、人力により遺物の採集を行った。更に程下げて行くと比較的遺物を多く含む淡こげ茶色土（第4図 第7層）、及び、灰茶色土（第4図 第6層）が現れたため、ここに1～11区に区分したグリッドを設定し、各グリッドを個別に掘り下げ調査を進めた。

第5層では、検出当初に古墳時代後期の須恵器坏蓋が完形品の状態で出土していたが、土師器等他の出土遺物から本層に関わる時代は奈良時代であると判断した。また、グリッドを設定した第7層からは須恵器や土師器の破片が出土しており、その特徴から古墳時代後期のものと判断した。

しかしながら、本包含層に包蔵された遺物には層序毎の時代的厳密性は確認できず、隣り合う時代の遺物がランダムに混入しているところから、本包含層は矢部川が発生させた水流作用によって



第3図 牛飼遺跡 平面実測図 [1/100]



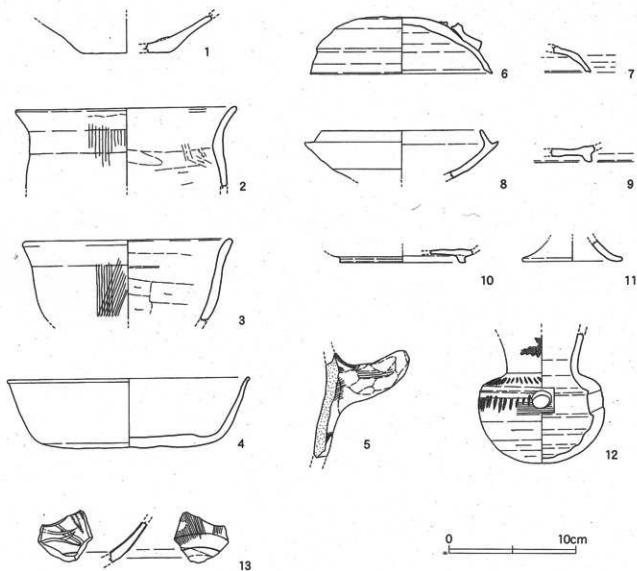
第4図 牛飼遺跡南東側土層断面実測図 [1/60]

形成されたものと考え、包蔵する遺物は水流が上流域、または、近隣に所在する他遺跡から運んできたものと判断した。

(2) 排土中出土遺物

土器 [第5図 PL3・4]

1～13は排土中、及び、遺構検出面表採遺物で、1は弥生時代後期の壺形土器の底部破片。底部外面に僅かながら膨らみがあり、レンズ底に近づきつつある。胎土中には石英や片岩の小粒子が少量含まれている。色調は外面が淡赤褐色、内面は淡白茶色を呈する。在地品と考えられる。2・3は甕形土器の口縁部で、2の口縁部、及び、肩部内面には煤が付着する。両者とも胎土中には石英や片岩の小粒子が少量含まれており、粒子の状況から在地品と考えられる。4は復元口径19.4cmを計る大型の土師器坏身。風化が著しく、表面調整の観察は困難であるが、底部にはヘラ切り離しの痕跡が遺存している。胎土は非常に良く精製されており、細砂粒も見られないことから外部からの搬入品と思われる。5は土師器の甕の把手。やや細目の芯部分を製作した後、ほぼ同量の粘土を上面から被覆させ指ナデを施し、本体と接合させている。接合後は基部を中心にハケ調整を施している。胎土に多量の石英粒子が含まれるが、片岩粒子は殆ど含まれていない。色調は淡赤褐色を基本とする。6は須恵器の坏蓋で、全体的にやや歪んでいる。体部外面に別個体の坏身部分が融着しており、この部分が中心となって歪みが強いことから、乾燥が十分でなかった製品も含め窯入れを行ったものと思われる。外面は黒灰色、内面は淡青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に石英粒子を多く含む。概ね小田編年のⅢB期を示すが、体部外面の段差などは若干古相を示している。7は赤焼け須恵器の坏蓋破片。外面は暗赤褐色、内面は赤褐色を呈している。焼成は良好で、胎土には僅かに石英小粒子が混入するが、精緻である。体部外面の段差は屈曲だけの表現となり、6と比してやや新相である。8は須恵器の坏身破片。内外面とも淡い青灰色を呈し、焼成は良好。胎土にはやや大振りの石英粒子が含まれる。特徴から小田編年のⅣ期にあたるが、外底面のケズリがやや深い。9は赤焼け須恵器の高台付の坏身破片である。表面の風化が激しく、諸特徴の識別が困難であるが、色調は内外面とも淡褐色を呈し、焼成はやや不良。胎土は非常に精緻で、石英粒子もほとんど含まない。体部屈曲面付近に短く、やや外方に踏ん張る高台が張り付けてあり、小田編年Ⅵ期にあたると思われる。10は須恵器の高台付の坏身破片である。内外面とも淡い青灰色がベースとなるが、表面には僅かに暗赤褐色が遺存する。焼成は良好で、胎土は精良で堅緻。体部屈曲部よりやや内側に短く、外方に踏ん張り端部を僅かに跳ねる高台が張り付けてある。小田編年Ⅵ期にあたると思われる。11は須恵器の小型高坏の脚端部破片である。内外面とも淡青灰色を呈し、焼成は良好。胎土には石英粒子がやや多い。脚部は太くて短いタイプであり、脚端部は屈曲部から反気味に反り、端部をために丸く仕上げる。本例のようなタイプは八女古窯跡群内ではあまり見られないことから、八女古窯跡群



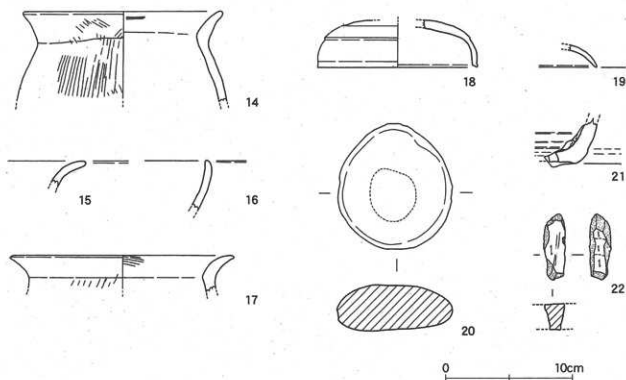
第5図 牛飼遺跡 排土中及び遺構検出面表探遺物 実測図 [1/3]

以外の産地を考慮すべきか。12は須恵器の甕。外面は黒灰色、内面は濃青灰色を呈している。焼成は良好で、胎土には大振りの石英粒子が多量に混入している。体部外面のヘラ削りは深く、体部中位まで入る。ケズリの方向は反時計回りをなす。体部や肩部にはヘラ状工具で押し圧痕が放射状に施文される。また頸部中位に振幅の少ない波状文が施文される。肩部が大きく張り、頸部も太く、沈線もシャープであるなど古相を示す。13は青磁碗の破片で、両面に発泡のない緑灰色の釉薬が薄くかかる。胎土は薄青気味の淡灰色で、非常に精緻である。見込み付近の施文は鋭く深い。

(3) グリッド出土遺物

土器 [第6図 PL4]

14～22はグリッド内出土遺物で、14は古墳時代後期の甕形土器の口縁部破片。張りのない肩部から斜め外方に短く延びた後、口唇部付近で更に外方に屈曲する。やや雑な作りで、内面には不定方向のヘラ調整が粗く入る。胎土は石英砂粒が主体となるが、僅かに片岩の細砂粒が含まれる。色調は外面が暗黄茶色、内面は黄茶色を呈する。15は土師器の甕形土器の口縁部破片。胎土は石英砂粒の他、雲母片岩を含む砂粒が含まれる。色調は外面が淡褐色、内面は褐色を呈する。16は土師器の碗形土器の口縁部破片。やや直線



第6図 牛飼遺跡 グリッド内出土遺物 実測図 [1/3]

気味に延びる体部上半から端部を丸くした若干内湾気味の口縁部がつく。口縁内面に淡黒灰色に変色した部分があり、被熱部と思われる。胎土は石英、片岩粒子の他、赤色の細粒も含む。色調は外面が暗褐色、内面は淡黄茶色を呈する。17は土師器の甕形土器の口縁部破片。強く短く外方に湾曲しつつ、口唇部は細めに仕上げる。内面の体部境付近には横方向に1条の沈線が入り、これを境として下部には反時計回りのヘラ削りが施される。胎土には石英、片岩粒子が多く含まれる。色調は外面が明褐色、内面は淡黄茶色を呈する。18は須恵器坏蓋の破片。全体的に丸みを帯びつつあり、体部と口縁部境や口唇部の有段が形骸化してきている。天井部外面のヘラ削りは反時計回りで浅い。外面は暗青灰色をベースとするが赤紫色が表出する。内面は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に石英粒子を多く含む。概ね小田編年のⅢB期を示す。19は模倣須恵器（土師器）坏蓋の口縁部破片。外面に黒色の漆が塗布される。胎土は非常に精製されており、岩石粒子の混入は皆無である。色調は外面が黒茶色、内面は茶灰色を呈する。20は石英斑岩製のすり石、または、砥石である。頂部にある擦痕は非常に滑らかであることから、短期間で使用が終了した磨製石器用の砥石である可能性が高い。表面には黒色化した鉄分を含む水性不純物が多く付着しており、ゆっくりとした水流に長時間漬かっていった事を示している。風化が進んでおり、色調は淡黄色を呈している。21は素焼き土器の底部破片で、焼成前に底部に孔がけられている。胎土は土師器等とは異なっており、陶器質に近い。色調は、外面が淡白褐色、内面が褐色を呈する。形状や胎土の状況などから、中世以降の火鉢の可能性が考えられる。22は石英斑岩の砥石破片。細片であり、詳細は不明だが、砥面には僅かな凹凸があり、小型の磨製石器を研いでいたものと思われる。

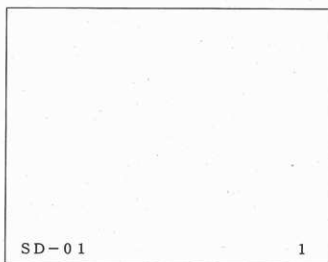
挿図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整 (外面、内面)	色調、胎土、焼成	備考
	5	1	R-21	排土中	壺形		3.5	2.8	淡赤褐色、石英・片 岩小粒子多、良好	片岩多く、在地 系
#	2	R-22	排土中	甕	17.6		6.3	縦ハケ、横ケズリ	暗茶褐色、片岩・石 英微粒子、良好	
#	3	R-26	排土中	甕	16.4		6.4	縦ハケ、横ケズリ	淡黄褐色、石英・片 岩粒子、良好	
#	4	R-7	排土中	坏身	19.4	14	5.5		淡黄褐色、精製、良 好	土師器 外部搬入品か。
#	5	R-30	排土中	甕把手				指ナデ、ハケ	淡赤褐色、多量の石 英粒子、良好	
#	6	R-34	表 探	坏蓋	14.5		4.5	ヘラケズリ、ナデ	黒灰色～淡青灰色、 精緻、良好	須恵器。外面に 融着あり。
#	7	R-27	排土中	坏蓋				ナデ	暗赤褐色、少量の石 英小粒子、良好	須恵器 赤焼け品
#	8	R-23	排土中	坏身	12.8			ヘラケズリ、ナデ	青灰色、大粒石英粒 子、良好	小田編年Ⅳ
#	9	R-28	排土中	高台付坏身					淡褐色、精緻、やや 不良	須恵器 赤焼け品
#	10	R-24	排土中	高台破片		10.1		ナデ、ケズリ	暗赤褐色、精緻、良 好	
#	11	R-25	排土中	高坏		8		ナデ	淡青灰色、石英・片 岩細粒子、良好	
#	12	R-31	排土中	甕		2	10.3	ナデ、波状・押圧文	黒灰色、精緻、良好	やや古相
#	13	R-29	排土中	甕 破片				ハケ目	緑灰色の釉、精緻	釉に発泡なし
6	14	R-8	グリッド1	甕	16			ハケ、ヘラ	暗黄茶色、石英砂 粒、良好	
#	15	R-6	グリッド3					ヘラ?	淡褐色、石英・片岩 粒子を含む、良好	
#	16	R-5	グリッド3	甕 破片				ヘラナデ	暗褐色、石英・片岩 粒子、良好	
#	17	R-4	グリッド3	甕 破片	18			ナデ、ハケ	明褐色、石英・片岩 粒子多い、良好	
#	18	R-2	グリッド4	坏蓋	13			ナデ、ヘラケズリ	石英粒子多い	小田編年ⅢB
#	19	R-3	グリッド4	坏蓋破片				不明	黒・茶灰色、精良、 良好	模倣須恵器 外面黒漆塗付
#	20	R-1	グリッド4	すり石?	長 10.1	幅 9.2	厚 3.6			砥石の可能性 有
#	21	R-33	グリッド5	火鉢?					褐色、砂粒少ない、 良好	陶器質 底部に突起
#	22	R-32	グリッド5	砥石			厚 2.1			石英斑岩

第1表 牛飼遺跡 出土遺物観察表

PLATES

凡例

出土遺物に関する記載は、以下の要領となっています。



(出土遺構番号)

(掲載番号)

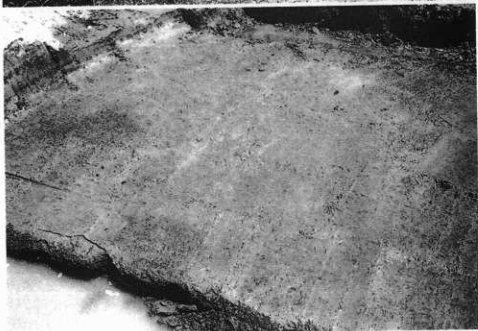
牛飼遺跡 調査前風景
(南より)



重機による表土除去



遺構検出面の状況





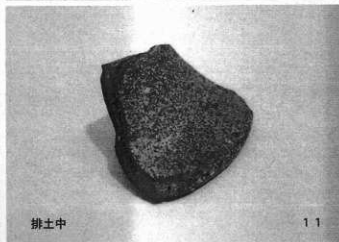
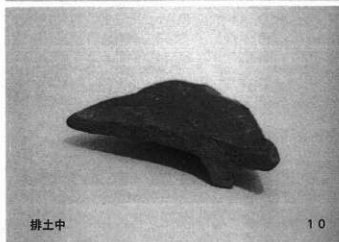
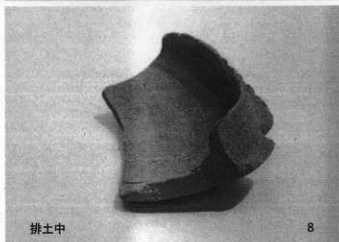
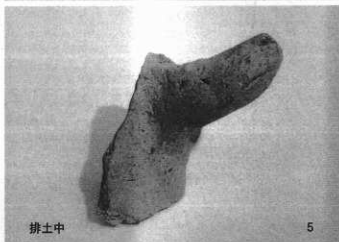
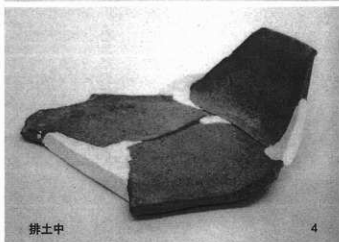
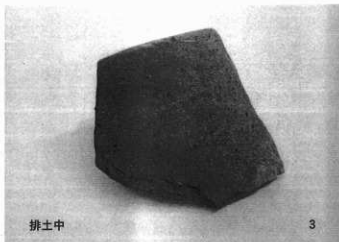
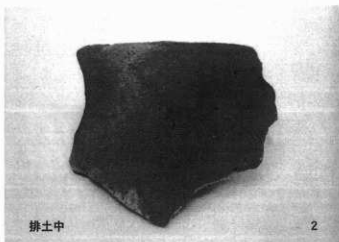
牛飼遺跡 南東側土層断面

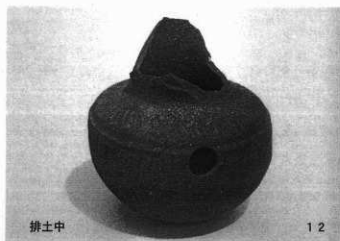


牛飼遺跡 掘削作業風景
(南より)



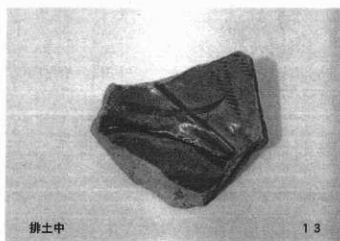
牛飼遺跡 水抜き作業風景
(南より)





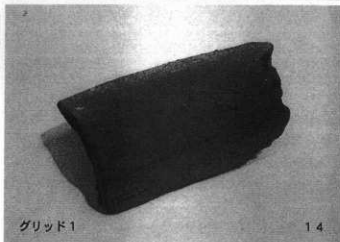
排土中

12



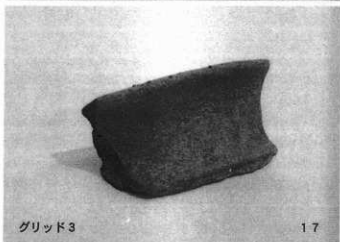
排土中

13



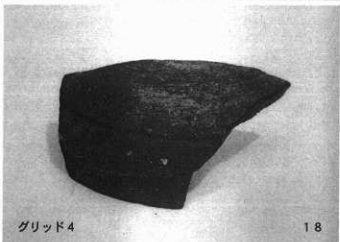
グリッド1

14



グリッド3

17



グリッド4

18



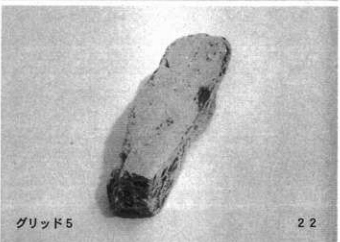
グリッド4

20



グリッド5

21



グリッド5

22

IV まとめ

今回の調査は平成21年度に現地調査を旧立花町教育委員会が行い、平成22年度に八女市教育委員会が合併に伴い業務を引き継ぎ整理作業を行い調査結果をまとめた上で報告書を発刊したものです。

調査着手前に行った試掘調査では弥生式土器や須恵器などの土器が出土し、住居跡を伴う集落遺跡の存在が予想されていましたが、調査区全体の表土を重機により除去すると現地表面の0.8m下からは予想していた住居跡などの集落痕跡ではなく、一時期湿地状態であったと思われる遺物包含層2層が検出されました。

調査を進めていくと粘性の弱い砂質状の土が広がり、様々な時代の遺物が包蔵されていることが判明しましたが、人工的に掘削されたと考えられる遺構はほとんど見られず、調査区北側に時期不明のビット（小穴）が2～3個検出されたにとどまりました。調査中、北端部付近からの湧水が顕著になり調査区が水没する等のアクシデントもありましたが無事終了し、出土遺物からは貴重なデータが取得出来ました。

出土遺物には弥生式土器や古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器などがありました。中心となる遺物は古墳時代後期の土師器で、全出土量の5割を占めています。破片資料が大半でしたが、外面に縦ハケ、内面にヘラ削りを用い、口縁屈曲部の内面に明瞭な稜線を持たせる等の特徴が良く観察できました。包含層出土の遺物中に多量の土師器が見られるということは、近隣に古墳時代後期の集落が存在していることを伺わせる現象です。

遺物の中には須恵器も比較的多く見られ、中には「赤焼け」と呼ばれる赤褐色の須恵器もありました。これらは古墳時代の集落にも見られますが、本遺跡の周辺には多くの横穴墓群や古墳が所在しており、これら墳墓群から流れてきたものと考えられます。また、一部の須恵器には焼成中の窯内で溶着したものも見られ、周辺に須恵器焼成用の昇り窯が存在する可能性も考えられます。

市内各地の発掘調査でも遺跡の全容が捉えられる事はあまりなく、遺跡全体のごく一部の調査で終了することがほとんどです。今回の牛飼遺跡の調査はそのような調査事例の1つでありましたが、発掘調査の実績が皆無に等しかった原島地区において遺跡の存在や広がり、周辺遺跡との関連性を知る上で、非常に大きな意義を持った調査であったと考えています。

今後も周辺に多数展開している遺跡群との時間的な関係や各遺跡間の繋がりを調べ、原島地区に住んだ先人たちが私たちに残してくれた郷土の歴史について探究していこうと考えています。

報告書抄録

ふりがな	うしかいいせき						
書名	牛飼遺跡						
副書名	福岡県八女市立花町原島字牛飼所在遺跡の調査報告書						
巻次							
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 91 集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2011年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うしかい 牛飼遺跡	ふくおかけん 福岡県 やめし たちばなまちほろじま 八女市立花町原島 うしかい 字牛飼	402109	33°12'28"	130°35'29"	2009 07 06 ~2009 10 20	約75㎡	県道拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
牛飼遺跡	包含層	古墳時代 後期	包含層	弥生式土器 土師器 須恵器			

牛飼遺跡

八女市文化財調査報告書
第91集

平成23年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (資) 東兄弟印刷所
八女市折持院563